

聖書:ルカの福音書14章25~35節

説教:主の弟子となる

はじめに

今日のところには、だれもがどこかで聞いたことのあるフレーズがいくつか出てきます。なかでも「十字架を負う」という表現は一般にもよく知られていて、苦しみを背負って生きるといような意味で使われます。また24節には、塩の話が出て来ますが、これも「クリスチャンは世の塩、世の光です」といような表現で、しばしば使われるところでは、ここは親しみやすい箇所であるはずなのですが、よく読むと理解に苦しむようなことが書かれています。そのなかでも一番引かかるのは、26節ではないでしょうか。聖書では、「隣人を愛しなさい」と言っているのに、憎みなさいと書いてある。これが本当だといふのなら、私は絶対にキリスト教は信じたくない。そう思われても当然でしょう。イエスはいったい何を言いたかったのか。ここにどのような恵みがあるのか。ともに考えてまいります。

1 主の弟子となる

1) 三つの条件

そこでまず、ここに書かれている内容をおさらいしてみます。大きく三つ分けられます。一つ目はイエスの弟子となる条件のことで、それが26節にできます。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」憎む相手が細かくリストアップされていて、数えてみると七つありますから、徹底的に憎みなさいというようにもとれます。

イエスの弟子となるための条件はそれだけではなく、27節にもあって、自分の十字架を負わなければならないと言われる。その意味については、なんとなく苦しみに関係しているのだろうとは思いますが、詳しい説明は何もありません。

イエスの弟子となるための条件はまだあって、33節では「自分の財産をすべて捨て」なさいと言われる。肉親を憎むのでさえどうかと思うのですが、ここまで言われたら頭を抱えてしまいます。もし私がこのみことばを振りかざして、「皆さんは財産をすべて捨てて、教会に全額献金しなさい」と言ったらどうなるでしょう。どこかのカルト宗教が言っていることとほとんど変わらない。もちろ

んイエスはそんな意味で語ったはずはない。ではどうということなのか。謎だらけです。

2) 事前に見積もる

今日の箇所、大きく分けて三つにあるうちの二つ目は、28節にある塔を建てる時のたとえと、31節の戦争を準備するときのたとえです。塔を建てる時は、建てる前に事前にくらかかると計算する。戦争をする時も、相手の兵隊の数や武器などいろいろなことを調べて、勝つことができるかどうか事前に見積もる。そういう話しです。こちらは読めばわかる内容で、説明の必要がありません。それはいいのですが、わからないのは、どうしてこの話しをここでするのか。イエスの弟子となることと、塔を建てる話しや戦争の話しとどんなつながりがあるのか。まったくつながりがあるようには見えませんが、なんだか急に道に迷ってしまった感覚に陥ります。

3) 塩のたとえ

そのことは後で見ることにして、今日の箇所が三つに分けられると言いましたが、その三つ目が34節。「塩は良いものです。しかし、もし塩が塩気をなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。」これも言っていることは難しくなくて、塩が塩気をなくしたら使い物になりませんから外に捨てられる。それはわかるのですが、でも、どうしてここで急に塩の話が出てくるのか。さっきの塔を建てる話、戦争の話が急に出てきたこともわかりませんが、なぜ塩の話が出てくるのか、これもやっぱりわからない。

2 イエスと群衆

1) 「イエスは振り向いて」

まるでつれた糸のようにわからないことだらけですが、すべて一本の糸として全部つながっているものとしてイエスは話しているはずですが、それでまず最初に何をするか。糸をときほぐすとき、まず糸の端っこを見つけて、そこからたどっていきまわります。ではこの場合、どこが糸の端っこにあたるか。25節にあります。「さて、大勢の群衆がイエスと一緒に歩いていたら、イエスは振り向いて彼らに言われた。」

イエスが振り向いたというのですから、イエスからご覧になって群衆はどこにいたということですか。イエスの後ろですね。人々は後ろからイエスについて来た。これが、この箇所を理解していくときの最初の手がかりになります。端っこが見つかったので、これがどこにつながっていくのか、その先をたどっていきます。

2) わたしについて来る

27節を見ます。「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」このなかの、「私について来ない者」に注目します。このままではわかりにくいので直訳すると、「私の後ろをついて来る者」となります。さきほどの25節と比べてください。イエスは、群衆がご自分の後ろを歩いてくる群衆をご覧になって、それと結びつけながら語っているとわかるでしょう。

そうしますと、こう言いたいのでしょうか。

「あなたがたは、わたしにぞろぞろとついてくるけれど、あなたがたがもし自分の十字架を負っていないのであれば、わたしについて来る資格はない。」あるいはこうでしょうか。「あなたがたがもし自分の親を憎まず、自分のいのちも憎んでいないのなら、わたしについてくる資格はない。」あるいは。「あなたがたが自分の財産を捨てようとしないのであれば、わたしについてくる資格はない。」こんなふうなたたみかけられるように言われたら、誰かイエスについて行ける者はいるのでしょうか。あまりにも厳しくて誰もできないのではないですか。そんなできないことをどうして言うのだらうか。そしてまた、どうして塔を建てた時や戦いをするときのたとえ話をし、塩気の話しませぬのか。これらにどんなつながりがあるのか。そこがまだわかりません。ここで壁にぶつかってしまいました。

3 イエス・キリスト

1) 自分の十字架を負う者

いつものことですが、非常に厳しいように思えるところにこそ、本当の恵みがあります。でも恵みに見えないのはなぜか。ここまでずっと、このことばは私たちのことだと思っていました。けれども壁にぶつかってしまいました。そこで発想をガラリと変えてみましょう。これがイエスのことだとしたらどうなるか。そう考えてみるのです。

例えば、自分の十字架を負わなければ、イエスの弟子となれないとありますが、そもそも自分の

十字架を負ったのはだれですか。イエスではないですか。ヨハネの福音書19章17節にこうあります。「イエスは自分で十字架を負って、「どくろの場所」と呼ばれているところに出て行かれた。そこは、ヘブル語ではゴルゴダと呼ばれていた。」

なぜ十字架を負うことになったのか。私たちの罪の身代わりのためです。それなのにイエスはなんと叫んだか。「自分の十字架を負って」と言われました。「あなたがたが負うべき十字架をわたしが代わりに背負いました」とは言いません。私たちの罪であるのにもかかわらず、この方は、「自分の十字架」と語ってくださった。そのようなことが見えてきます。

2) 自分のちちと自分のいのちを憎む者

では「憎む」ことについてはどうでしょうか。26節で「自分の」と言っているのは「自分の父」と「自分のいのち」、この二つであることに注意してください。この「自分の」と言われているのは、「わたしのもとに来る人」のことだということとは明かです。でも、進んで自分の父を憎んだり、自分のいのちを憎む者はいませんから、わけがわからなくなってしまいました。ここでも発想の転換をします。「自分の父」とは、肉親としての父親ではなく、父なる神のこととしたらどうでしょうか。そしてまた「自分のいのち」とは誰のことか。自分自身のいのちではなく、私たちのいのちである方、イエスを指すと考えてみたらどうですか。このとき、群衆はイエスを憎んではいません。でも、やがてこの群衆は手のひらを返すようにして、神を憎み、イエスを憎んで十字架に押し寄せていきました。

3) 事前に計算している

そのとき、人々は思いました。イエスは十字架で敗北した、失敗した。それはまるで塔を建てようとして、土台だけ据えて完成できなかったようであり、あまりにも無謀な負け戦をしたようなもの。

でもイエスはなんと叫んだか。28節。「あなたがたのうちに、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人がいるのでしょうか。」イエスは事前に十分に計算していた。この戦いが勝てるのかどうかをきちんと見きわめて戦いに臨んだ。決して無謀なことをしたのではない。十分に計算し尽くして綿密に計画を立てて十字架に向かった。

4) 外に投げ捨てられる

では34節の塩の話はどうなるか。この塩がイエス・キリストを指しているとしたらどうでしょう。もちろんイエスはいつ、どんなときでも塩気を失うことはありません。しかし、人々はどうかだったのでしょうか。この14章の時点では、塩気がある、つまり役に立つと皆思っていた。だからイエスの後をぞろぞろとついていきます。でもイエスが十字架におつきになったときはどうですか。「ああ、あんな男に期待した自分たちが愚かだった、役立たずめ」とののしり、あの男には塩気がないと人々は思い込み、ゴルゴタの丘、すなわち町の外に投げ捨てた。

これでおわかりでしょう。ここに書かれていることはすべてイエスご自身のことだったのです。イエスの弟子となるための条件が非常に厳しいものであった理由はここにあります。十字架につくのはイエス一人しかいないからです。他の者が十字架につくことがないように、いえすはあえて厳しい条件をつけました。

5) 私たちのために

では、ここに書かれていることは、私たちにまったく関係ないことだったのか。皆さん考えてみてください。自分の父や母との関係。妻、夫、子ども、兄弟姉妹。みな仲良くしていますという方はどれだけおられるか。多くの人は肉親同士ギクシャクした関係で悩んでいる。私はずっと父を憎んで生きていた者でした。和解しなければと思いつつながら、それができずに父と死に別れてしまいました。神の救いをいただく資格などないと思うところ。ところがイエスに言わせれば、あなたはわたしの弟子となる資格があるということになる。

また、つらいことが重なったりすれば、自分は生まれ来なければよかった、死んだ方がよいと思うこともあります。それは「自分のいのちを憎んでいる」ということになる。とても神の所に行く資格などないと誰もが思います。ところがイエスに言わせれば、あなたはエスの弟子となる資格があるということになる。

長く生きていくと人生いろいろなことが起きます。人にだまされたり、事故や災害に遭って財産を失うこともあります。たとえ平穏無事に過ごしたとしても、年とともに健康を失い、最期の時はすべてのものを手放さなければなりません。イエスに言わせれば、「自分の財産をすべて捨て」る時だったのです。自分には残されたものが何もない。そんな絶望の瞬間、イエスは語ってくれる。あなたはわ

たしの弟子となる資格がある。ここにあるのは、全部恵みのことばでした。

イエスは、そんな私たちのために、喜んで十字架を背負い、喜んで、外に捨てられていきます。十字架は敗北のように見えたが、そうではない。イエスは十分に計算し、この戦いに勝てることがわかって、十字架に向かいました。だから私たちは安心してイエスの十字架に行くことができる。十字架のみもとに招いてくださる主の御名をあがめます。